

2022 年度 支部活動報告・発表要旨

東北支部 活動報告・発表要旨

2022 年 7 月 30 日	佐々木 和貴	ペスト禍のシェイクスピア
2022 年 7 月 30 日	川田 潤	17 世紀後半のユートピア的モーメント
2023 年 3 月 28 日	川崎 和基	パンフレット戦争の黎明— <i>Areopagitica</i> と出版物検閲制度をめぐって

ペスト禍のシェイクスピア

佐々木 和貴

ウィリアム・シェイクスピアは、ペストとともに生きた作家だった。そもそも彼の生まれた年の夏、故郷のストラットフォード・アポン・エイヴォンは、ペスト禍にあった。さらに彼が芝居を書いていた時期のロンドンでは、実に 3 回もペストの大きな流行があった。その間のペストによる死亡者数は 4 万人を超えており、当時 20 万のロンドンで、これがどれほどの大災厄であったかは容易に想像がつく。そこで、本発表では、当時の流行の具体的な様子と彼の作品を交互に取り上げながら、ペストと隣合わせの日々を生きたシェイクスピアが、その惨状をどのように取り込んだのか、つまり、彼の芝居に映し出されたこの疫病の影を追ってみた。

取り上げたのは、唯一ペストが作品中にはっきりと登場する『ロミオとジュリエット』、ペストの光景が反映したとおぼしき台詞が散見される『リア王』と『マクベス』、ペストとの共生が隠れたテーマと考えられる『テンペスト』である。そして、ポスト・コロナの時代を生きる知恵を得るために、私たちはペスト禍を生き抜いたシェイクスピアの作品にふたたび向かい合うべきであると結論付けた。

なお本発表原稿は、大幅に加筆修正の上、『ペストの古今東西～感染の恐怖、終息への祈り

～』第3章(83~114頁)(秋田文化出版、2022年9月刊)に収録された。

主要参考文献

- Ackroyd, Peter. *Shakespeare: The Bibliography*. Nan A. Talese, 2005.
- Anonymous. *The True Chronicle Historie of King Leir and Three Daughters. Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, vol.VII. Edited by G. Bullough. Routledge, 1973.
- Brooke, Arthur. *The Tragicall History of Romeus and Juliet. Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, vol. I. Edited by G. Bullough. Routledge, 1957.
- Barroll, Leeds. *Politics, Plague, and Shakespeare's Theatre*. Cornell UP, 1991.
- Bell, John. *London's remembrancer, or, A true accompt of every particular weeks Christnings and mortality in all the years of pestilence within the cognizance of the bills of mortality, being xviii years*. London, 1665.
- Duncan-Jones, Katherine. *Shakespeare: An Ungentle Life*. Methuen Drama, 2010.
- Dekker, Thomas. "The Wonderful Year." *Thomas Dekker: Selected Prose Writings*. Edited by E.D. Pendry. Harvard University Press, 1968, pp. 23-64.
- Greenblatt, Stephen. "What Shakespeare Actually Wrote About the Plague." *The New Yorker*, 7 May 2020, <https://www.newyorker.com/culture/cultural-comment/what-shakespeare-actually-wrote-about-the-plague/>.
- . *Will in the World: How Shakespeare Became Shakespeare*. Jonathan Cape, 2004.
- Potter, Lois. *The Life of William Shakespeare: A Critical Biography*. Wiley-Blackwell, 2012.
- Shapiro, James. *The Year of Lear: Shakespeare in 1606*. Simon & Schuster, 2015.
- Wilson, F.P. *The Plague in Shakespeare's London*. Oxford UP, 1927.
- 佐野隆弥「エリザベス朝散文とその後(一)—ペスト表象を中心に—」『文藝言語研究 文藝篇』vol.62, 2012, pp.43-59.
- 鶴田学「感染症の時代に読み直す『ロミオとジュリエット』」『英文学研究 支部統合号』vol. XIV, 2022, pp.231-239.
- デフォー、ダニエル『ペストの記憶』武田将明訳、研究社出版、二〇一七年。
- 見市雅俊『ロンドン＝炎が生んだ世界都市—大火・ペスト・反カソリック—』講談社選書メチエ、一九九九年。

本発表では、これまで等閑視されてきたヘンリー・ネヴィル (Henry Neville) の『パインの島』 (*The Isle of Pines*, 1668)を取り上げ、このテキストが、どのような国内外の政治状況や他の言説と結びついていたかを考察した。

最初に、本作が、＜嵐でとある島国に船が流れ着き、その国を見聞し、帰国してその報告をする＞という枠組、国の混乱を防ぐための法律の記述などがあり、典型的なユートピア物語の特徴を備えていることを確認した。しかしながら、(数少ない) 近年の先行研究では、本作の＜一夫多妻制と性的放縦＞、＜植民地主義と黒人差別＞などが注目されるのみで、ユートピア性はあまり重視されてこなかった。そこで本発表では、出版当時の国内外の政治状況を考慮に入れることで、本作のユートピア的モーメントの重要性を検討した。第一に、この物語が血統に基づく絶対王制の有効性と欠点を明らかにし、王権を評議会によって制限する共和主義的ユートピア性をもつことを指摘した。すなわち、絶対王制、共和主義政府を経た王政復古期、君主の暴政とその結果として生じる(再)内乱の不安という国内の政治状況の中でこの物語が書かれていることを明らかにした。第二に、物語が結末部において、国内の反乱を鎮圧するために、国外勢力(オランダ)の力を借りることに注目し、王政復古後のイングランドと共和制・先進商業国家オランダとの協調関係の必要性が提示されていると指摘した上で、更に、この物語が最終的には、「農業と園芸に基づく国家」である「パインの島」の礼讃で終わることに着目し、単純にオランダとイングランドの協調関係ではなく、いまだ商業的要素(と結びついた公共の徳)を理想国家に取り込むことの不可能性も示されていることを指摘した。すなわち、農業共同体を基盤とする中世的理想国家像から、商業と個人の欲望が結びつく資本主義、帝国主義的国家像への移行期において、『パインの島』は不在の理想項を示すユートピア的モーメントをもつテキストであることを明らかにした。

主要参考文献

- Mahlberg, Gaby. "The Critical Reception of *The Isle of Pines*." *Utopian Studies*, vol.17, no 1, 2006, pp.133-43.
- "Historical and Political Contexts of *The Isle of Pines*." *Utopian Studies*, vol.17, no 1, 2006, pp.109-10.

- Nevil, Henry. *The Isle of Pines and Plato Redivivus*. Edited by David Womersley. Liberty Fund, 2020.
- Norbrook, David. *Writing the English Republic: Poetry, Rhetoric and Politics, 1627-1660*. Cambridge UP, 1999.
- Scheckter, John. *The Isle of Pines, 1668: Henry Neville's Uncertain Utopia*. Ashgate, 2011.
- Stillman, Peter G. "Monarchy, Disorder, and Politics in *The Isle of Pines*." *Utopian Studies*, vol.17, no 1, 2006, pp.147-76.
- Sullivan, Vickie B. *Machiavelli, Hobbes, & the Formation of a Liberal Republicanism in England*. Cambridge UP, 2004.
- Wiseman, Susan. "'Adam, the Father of all Flesh,' Porno-Political Rhetoric and Political Theory in and After the English Civil War." *Pamphlet Wars: Prose in the English Revolution*. Edited by James Holstun. Frank Cass, 1992, pp.134-57.
- Womersley, David. "Introduction." *The Isle of Pines and Plato Redivivus*. Liberty Fund, 2020, pp. ix-xxxiv.

＊

- ポーコック, J・G・A 『マキャヴェリアン・モーメント』 田中秀夫, 奥田敬, 森岡邦泰訳 名古屋大学出版局, 2008 年.
- 松井信之「共和主義、その限界と広がり——スキナー, ポーコック, ネグリを通して——」『立命館国際研究』26 巻 2 号, 2013 年, pp.359-77.

パンフレット戦争の黎明—Areopagitica と出版物検閲制度をめぐって

川崎 和基

イングランドにおいて、政体の維持のため、事前検閲制度が果たした役割は大きいといえる。1637 年に発布された「出版に関する星室庁令」(*A Decree of Star-Chamber concerning Printing*)では、ウィリアム・ロードは扇動的な思想や異端思想の抑制を目的とし、扇動的な書物・パンフレットの検閲を行い、法律、歴史、紋章、宗教といった分野にそれぞれ専属の検閲官を任命した。また、それぞれの検閲官の他に、書籍出版業組合が事前検閲に大きな役割を果たしていた。

しかしながら、1641 年の星室庁廃止に伴い、事前検閲が緩み、無許可の出版物やパンフレットが噴出することになり、書籍出版業組合はその噴出を抑えることができなくなった。そして、その噴出は言論戦争の手段となり、その時期はパンフレット戦争の黎明期といえる。そこ

で、書籍出版業組合からの要請を受け、議会在 1643 年に *An Ordinance for the Regulating of Printing* いわゆる「1643 年検閲法」(*Licensing Order of 1643*) を発布し、事前検閲制度の継続を図った。

ジョン・ミルトンは、1644 年に「アレオパジティカ」(*Areopagitica*) で、「出版に関する星室庁令」と同様に異端思想を抑制しようとする「1643 年検閲法」を非難した。ミルトンは、特に人間の学問に必要な知恵の源である書物に対する検閲に異を唱えた。また、「アレオパジティカ」で、ミルトンは当時の出版事情を認識しながら、書籍出版業組合の事前検閲への関わりと彼らの思惑を非難した。

本発表では、「アレオパジティカ」を手がかりとして、事前検閲制度で「出版に関する星室庁令」や「1643 年検閲法」などの法令と書籍出版業組合の機能を検討し、さらに、星室庁令の廃止から噴出したパンフレットによる言論戦争すなわちパンフレット戦争の黎明期を探った。

主要参考文献

Campbell, Gordon and Thomas N. Corns. *John Milton: Life, Work and Thought*. Oxford: Oxford UP, 2008.

Firth, C H and R S Rait, eds. *Acts and Ordinances of the Interregnum, 1642-1660*. His Majesty's Stationery Office: London, 1911. "A Decree of Star-Chamber concerning Printing, made the Eleventh Day of July last past, 1637." <<https://www.british-history.ac.uk/rushworth-papers/vol3/pp306-316>> 10 March 2023.

---. "An Ordinance for the Regulating of Printing." <<https://www.british-history.ac.uk/no-series/acts-ordinances-interregnum/pp184-186>>. 10 March 2023.

Hill, Christopher. *Milton and the English Revolution*. London and New York: Faber and Viking, 1977.

Hughes, Ann. *Gangraena and the Struggles for the English revolution*. Oxford: Oxford UP, 2004.

---. *The Causes of the English Civil War*. 2nd Ed. New York: St. Martine's P, 1998.

Lake, Peter. "Deeds against Nature: Cheap Print, Protestantism and Murder in Early Seventeenth Century England." Christopher Durston and Jacqueline Eales eds. *The Culture of English Puritanism 1560-1700*. 145-183. London: Macmillan P, 1996.

Milton, John. *Complete Prose Works of John Milton*. Gen. ed. Don M. Wolfe. 8 vols. New Haven: Yale UP, 1953-1982.

Peters, Kate. *Print culture and the early Quakers*. Cambridge: Cambridge UP, 2005.

2023 年 3 月 25 日	田村 真弓	Mask から Masque へ——仮面劇の変遷——
2023 年 3 月 25 日		17 世紀研究 この一冊

Mask から Masque へ——仮面劇の変遷——

田村 真弓

17 世紀のイギリスで花開いた宮廷仮面劇が、どのように誕生し、発展していったのか、そして、清教徒革命によって本当に消滅したのかを、共和制期や王政復古期の上演、オペラとの関連を考慮しつつ、従来の研究よりも幅広い視点で時系列に論じた。

仮面の祝祭の元祖は、季節の周回と生と死の循環にまつわる民衆の宗教儀式、mumming（仮装の儀式）であり、そこから、仮装をした人物が、行進して家を訪問し、贈り物をしたり、ダンスを踊ったりする momerie（仮装行列）に発展した。

貴族が室内で行った disguising（仮装の見世物）は、市民が屋外で行った pageantry（山車舞台の見世物）から派生したものであり、その後、観客から踊りのパートナーを選ぶ、観客参加型のイタリア式の仮面舞踏会(masquerie)が、イギリス宮廷に持ち込まれた。

ヘンリー八世時代には、disguising と masquerie の融合した masque（仮装の見世物と舞踏会）が誕生した。この余興で、初めて、王侯が主体的に舞台に上がり、劇中の役を演じることになった。エリザベス一世時代には、フランシス・ダヴィソンの『プロテウスの仮面劇』が上演された。これは、一貫した筋書きのある演劇性の高い disguising と、松明持ちに導かれた行列である momerie、そして、仮装者が観客からパートナーを選んで踊る masquerie の混合であった。ジェームズ一世時代には、court masque（宮廷仮面劇）が完成し、幾何学的な隊列のダンスや舞台装置により、宮廷統治の政治性を持つようになった。チャールズ一世時代には、ジョン・ミルトンが、mask と呼ばれる道徳的な反仮面劇を執筆した。

演劇の上演が禁止された共和制期には、元宮廷仮面劇作家、ウィリアム・ダヴェナントによって、オペラ(opera)という名の仮面劇が制作され、様々な制約を乗り越えて上演された。王政復古期には、公衆劇場において、ダヴェナントの主導で、仮面劇的なスペクタクル劇が上演された。この時期、チャールズ二世や貴族が、公衆劇場に足を運ぶようになり、革命以前は王

と貴族の間にだけ存在した宮廷内のヒエラルキーが、一般大衆にまで広げられた。

以上、仮面と仮装の余興は、民衆の儀式に始まり、宮廷での見世物となり、宮廷仮面劇として完成された後、王室と共に滅びたかに思われたが、再び、スペクタクル劇という民衆の娯楽として復活した。こうした「仮面劇(mask/masque)」の歴史上、常に共通していたのは、秩序の回復という結末、踊りや衣装の視覚効果、歌や音楽の聴覚効果といった要素であった。要するに、いつの時代も、人々が仮面の余興に求めるのは、こうした祝祭性に他ならない。仮面劇は今後も途絶えることなく、形を変えて上演され続けることだろう。

主要参考文献

- Butler, Martin. *The Stuart Court Masque and Political Culture*. Cambridge: Cambridge UP, 2008.
- Edmond, Mary. *Rare Sir William Davenant*. New York: St. Martin's Press, 1987.
- Jonson, Ben. *The Complete Masques*. Ed. Stephen Orgel. New Haven: Yale UP, 1969.
- Lindley, David, ed. *Court Masques: Jacobean and Caroline Entertainments, 1605-1640*. Oxford: Clarendon Press, 1995.
- Orgel, Stephen. *The Illusion of Power*. Berkeley: U of California P, 1975.
- Peacock, John. *The Stage Designs of Inigo Jones: The European Context*. Cambridge: Cambridge UP, 1995.
- Strong, Roy. *Art and Power: Renaissance Festivals, 1450-1650*. Woodbridge, Suffolk: The Boydell Press, 1984.
- Welsford, Enid. *The Court Masque: A Study in the Relationship between Poetry and the Revels*. Cambridge: Cambridge UP, 1927.
- White, Eric Walter. *The Rise of English Opera*. New York: Da Capo Press, 1972.

17世紀研究 この1冊

支部例会における新たな試みとして、研究発表に加えて、「17世紀研究 この1冊」と題するセッションを設けた。新旧を問わず17世紀研究に関する書籍を紹介し合うことで、参加者の交流と情報共有を目指すものである。若手からベテランまでの参加者が、自身の学究の出発点となった研究書や、思い出の1冊、最新の批評や校訂版まで、幅広い書籍を取り上げ、活発な意見交換がおこなわれた。参加者からはおおむね好評であったので、支部としては本企画を今後も継続的に実施していきたいと考えている。（文責：伊澤高志）

2022 年 6 月 25 日	廣野 允紀	引き剥がされる人間と階級の衣—『ヘンリー六世・第二部』を動物と衣服から読む—
2022 年 12 月 3 日	水野 眞理	Henry David Thoreau と十七世紀英国詩人
2023 年 3 月 25 日	鳥養 志乃	John Donne の “Divine Meditations” における宗教的物語—Christ への不敬を含む 16 編のシークエンスとしての全体像—

引き剥がされる人間と階級の衣
—『ヘンリー六世・第二部』を動物と衣服から読む—

廣野 允紀

本発表では、『ヘンリー六世・第二部』に登場する貴族同士の権力争いを描き出す動物のイメージに焦点を当てた。宮廷貴族は彼らの権力が喪失していく共に、同時に、彼らの人間性も失われていく。貴族は権力を求め、獣のごとく醜く争い、最後には没落する。この過程が動物のイメージで描かれ、貴族の社会的地位の喪失と人間性の喪失が結びついている。

動物のイメージだけでなく、衣服の役割も『ヘンリー六世・第二部』のキャラクターの不安定な地位を描き出している。シェイクスピアの時代、衣服は階級社会の秩序を表す記号であり、平民は身分に応じた衣服を身に着けるように定められていた。しかしながら、こうした奢侈禁止法が繰り返し出される一方で、当時は衣服による身分秩序が崩壊していた時代でもあった。反乱の首謀者である仕立て屋ジャック・ケイドが言う、「みんなに同じ服を着せてやる (I will apparel them all in one livery)」(4. 2. 73-74) という言葉には、身分に応じた衣服を身につけなければならないエリザベス朝の奢侈禁止法への反発が映し出されている。また、平民たちがみすばらしい「半ズボン (hose)」と「ダブレット (doublets)」を身に着けているにも関わらず、「馬にコートを着させるべきではない (thou oughtst not to let thy horse wear a clock)」とケイドはセイに説くが、(4. 7. 46-53)、この場面から、衣服の規制によって、その尊厳を獣にまで引き下げられた平民の不満を読み取ることができるのである。

反乱の中で、階級社会における衣服の役割だけでなく、ケイドは教育そのものも否定する。

この劇が書かれた当時、教育は無教養で無知な民衆と貴族を隔てる境界線でもあった。しかし、グラマースクールが多く建てられ、国民の読み書き能力が高まったことから、この時代の教育は貴族階級に限定されるものではなくなってきた。同時に、教育は人間と非人間を隔てるものでもあったが、シェイクスピアの時代、馬に芸を仕込む指南書が多く執筆されており、この事実は、理性や言語能力の有無が人間と動物を隔てていた当時において、馬の学習能力や人間の言葉を理解する力が認めてしまう矛盾を示唆しているのである。

『ヘンリー六世・第二部』では、社会的地位・権力を表す衣服と教育の役割の崩壊が描かれている。同時に、これらは人間と動物を隔てる境界線でもあった。イングランドにおけるこうした境界線の崩壊を作り出しているのは王ヘンリー六世に他ならない。彼は無責任にも議会を放棄し、王ではなく家臣になることを求め、戦場から逃げ出す。国家を治めることができないヘンリーはまるで子供のようであり、この劇における彼の存在は衣服と教育が作り出す境界線の崩壊を体現しているのである。

主要参考文献

- Calderwood, L. James. "Shakespeare's Evolving Imagery: 2 *Henry VI*." *English Studies*, vol. 48, 2008, pp. 481-93.
- Candido, Joseph. "Getting Loose in the Henry VI Plays". *Shakespeare Quarterly*, vol. 35, no. 4, 1984, pp. 392-406.
- Hazlitt, William. *The Complete Works of William Hazlitt: vol. 4, The Round Table and Characters in Shakespeare's Plays*. Edited by P. P. Howe, J. M. Dent and Sons, 1930.
- Jardine Lisa. *Still Harping on Daughters: Women and Drama in the Age of Shakespeare*. Columbia University Press, 1989.
- Jones, Ann Rosalind and Peter Stallybrass. *Renaissance Clothing and the Materials of Memory*. Cambridge University Press, 2000.
- Knowles, Ronald. "Notes." *King Henry VI Part 2*, edited by Ronald Knowles, Bloomsbury, 2016, pp.166-392.
- Manheim, Michael. *The Weak King dilemma in the Shakespearean History Play*. Syracuse University Press, 1973.
- Semenza, Gregory M. Colón. Sport, War, and Contest in Shakespeare's *Henry VI*. *Renaissance Quarterly*, 2001, vol. 54, no. 4, part1, pp. 1251-1272.
- Shakespeare, William. *The Riverside Shakespeare*. Edited by G. Blakemore Evans and J. J. Tobin, Houghton Mifflin, 1997.

本発表は、アメリカ 19 世紀の Henry David Thoreau の *A Week on the Concord and Merrimack Rivers* (1848 以下 *A Week* と略記する) における十七世紀英文学からの引用をとりあげ、そこから Thoreau のクラシシストとしての側面をさぐる試みである。*A Week* には Thoreau の夥しい引用癖が現れている。一方、おそらく出版を意識せずに書き綴った *Journal* では、文学作品からの引用が少ない。これを考えると、アメリカの自然と深く付き合い、紛れもなくロマンティシストであった Thoreau ではあるが、出版という社会的営為に関わる時、むしろクラシシストとしての自己を演出しているように思われる。

発表では、まず *A Week* を概観し、ついでそこでの十七世紀詩人の引用を検討した。

1. *A Week* 概観

A Week は 1839 年の夏の二週間にわたる兄との川の舟旅の記録を一週間の形にまとめたものである。執筆の契機となったのは、舟旅の 3 年後の 1842 年に兄が若くして亡くなったことだとされるが、その材料となっているのは、Thoreau 自身の記憶のほかに、彼が書き留めた *Journal* の記述がある。舟旅の二週間に対応する *Journal* の箇所を見ると、たしかに、数ページの簡単な記述はある。しかしそれが約 400 ページの長篇となったのは、*Walden* と同様、舟旅以前から出版直前までの自らの *Journal* からの自己引用と、彼の気に入りの文学作品からの夥しい引用を入れつつ、digression としての思索、すなわち人生論、自然論、文学論、地方史などを展開しているからである。むしろ、舟旅の記録よりも、そういった思索に割かれる頁数のほうが多いと言える。そして、初版のあとも Thoreau は死の直前まで再版をめざして改訂作業を行っていた。

邦訳者山口晃のいう「兄の思い出と挽歌としての川旅」という情緒的な側面、また土地と自然の観察に基づく思索的な側面の一方、さらに、手元にある材料を組み合わせ、旅と随筆を併せ持つ「教養ある」作品（まさにそれは、Samuel Johnson を代表とする 18 世紀的な紀行文の特徴なのだが）を構築する、という側面を無視することはできない。

2. *A Week* における引用

A Week における引用の特徴は、文学ではギリシャ・ローマの詩人と、Chaucer、そして 16、17 世紀の詩人を多く引用し、18 世紀以降の英国詩人、たとえば Pope やロマン派の詩人から

の引用はほとんどない、ということである。Thoreau は自らの直前の世代の英国ロマンティストたちよりも、むしろ古典に魅力を感じていただろうか。

Thoreau の古典の知識の基本は Harvard 大学時代に得られたものであり、彼がその当時、大学での文学教育は古典教育を意味していたから、彼の中に蓄積されている文学的 store が *A Week* の材料を形成しているとしても驚くにはあたらない。

16、17 世紀の英国詩人としては、Spenser、Shakespeare、Donne に加えて、Samuel Daniel、Giles Fletcher、Francis Quarles などのややマイナーな詩人も多く引用される。古典からは Virgil が多く、あとは Homer、Ovid など。ただし、アメリカでの同時代人、すなわちきわめて身近であった Ralph Waldo Emerson と友人の William Ellery Channing からの引用は見られる。これに加えて、New England の歴史関係の書物と、インド哲学書がしばしば引用される。

3. Spenser からの引用

Hawthorne の Spenser 受容が、そのロマンス性とアレゴリー性に惹かれてのものであったのに対し、Thoreau が好んで引用する Edmund Spenser (1552-99) の詩行には、パストラル性を帯びたものが多い。たとえば、かつて Connecticut 川に沿って旅した時の回想の中で、旅人に宿を提供している農家の場所が古典的な心地よい場所 *locus amoenus* にも匹敵することを Spenser の *The Faerie Queene* からの引用によって示し、古典的な理想の風景にアメリカの田園風景を重ねる。文明と野蛮、礼節と粗野、というテーマは、まだ原野の残るアメリカ、そしてインディアンとの遭遇を繰り返してきたアメリカ人にとって常に意識に上るテーマであっただろう。

4. Quarles からの引用

Spenser からの引用が 4 つにとどまるのに対し、寓意詩人 Francis Quarles (1592-1644) の『寓意詩集』(*Emblems*, 1634) および『象形文字』(*Hieroglyphics*) からの引用は 13 に上る。たとえば、舟旅の最後に Thoreau たちが野営をした岸からボートに戻ってきて、朝露に濡れたそれをみて秋を悟る、という場面がある。ここで引用される *Hieroglyphics* の一節は、季節がめぐるように、自然の作用で人も万物も老いていくことを憂わし気にうたっている。これを Thoreau は秋が兆す川辺の風景に当てはめた。Quarles の発想は自然の背後の声を聴くという Emerson から Thoreau に受け継がれている態度と共鳴する。

5. Conclusion

Thoreau が 16、17 世紀の詩人を愛好したことの理由は、Thoreau 自身が詩について述べた

箇所説明される。Thoreau は Samuel Daniel の詩行を引用し、その中で言葉の文化をエリザベス朝の詩に代表させ、それに対して Thoreau の時代の名誉や権力の横行を嘆いている。

それに続く部分で Thoreau は、16-17 世紀英国の文章を賞賛する。賢い文章よりも、確固として実体を持つ文章、自分で何を言っているのかを分かっている書き手の文章が好きだ、とし、エリザベス朝英文学の代表例として Sir Walter Raleigh を挙げる。読書体験を野歩きに譬え、読者はその「歩行」と「息継ぎ」にたとえられる文体に出会うことで緑に覆われた土地、土の深さと強さに出会った思いがする、という。Raleigh に代表される 16-17 世紀の英文は、事実と経験に根差しているから常緑のように緑で、花のように咲き誇っている、それに対し、現代のまやかしで華やかな文章は樹液も根っこもない、花の色をしているだけだ、と批判する。理想の文章を緑野にたとえるロマンティズムと、英文学が花開いたエリザベス朝の文体を範とするクラシズムが同居していることが見て取れる。

参考資料

Kelly, Kathleen Coyne. “Medievalism”, Chap. 7, *Henry David Thoreau in Context*, ed. James S.

Finley. Cambridge UP, 2017. 67-77.

Curley, Thomas M. *Samuel Johnson and the Age of Travel*. Univ. of Georgia P., 2009.

Leicy, Ernest E. “Francis Quarles and Henry D. Thoreau.” *Modern Language Notes*, Vol. LX, No. 5 (May 1945). 335-36.

---. “Sources of Thoreau’s Borrowings in a Week” *American Literature*, Vol.18, No. 1(May 1946), 37-41.

Quarles, Francis. *Emblems Divine and Moral: together with Hieroglyphics of the Life of Man*. H. Trapp, 1777.

Thoreau, Henry David. *A Week on the Concord and Merrimack Rivers*. Ed. Karl Hovde. Princeton UP, 1980.

ジェイムズ・C・マキューシク『グリーンライティングーロマン主義とエコロジー』川津 他訳 音羽書房鶴見書店 2009.

ヘンリー・ソロー『コンコード川とメリマック川の一週間』山口晃訳 而立書房 2010.

John Donne の“Divine Meditations”における宗教的物語
—Christ への不敬を含む 16 編のシークエンスとしての全体像—

鳥養 志乃

John Donne (1572-1631) の *Holy Sonnets* の 1 つである “Divine Meditations” は、生前の様々なマニュスクリプトから、Herbert J. C. Grierson 版 (1912) から始まる 20 世紀以降の注釈付き総詩集に至るまで、版によって掲載順序の異なる詩群である。しかし “Divine Meditations” の各作品は「死後の贖罪」「Christ の奇跡」「身体と過去の罪」の大きく 3 つに焦点が分かれている。このことから本研究では独自に “Divine Meditations” の作品を 3 つの物語群に分類し、中でも 1635 年版の 16 編について、関連作品や創作背景、Donne の死後に初めて出版された 1633 年版と 1635 年版の両方の順番を踏まえながら、物語シークエンスとしての読みを 3 段階で提唱した。初めに、Helen Gardner の “the Last Things” の指摘や Ferenc Zimlányi の Frei Luis de Granada の *Book of Meditations* との関わりを援用しながら、献呈詩 “To E. of D” で言及される 7 編が全ての版で必須且つ順番が固定された HSDue、HSBlack、HSScene、HSRound、HSMIn、HSDeath、HSWilt であると主張。その内、1633 年版内 1～6 番でもある冒頭の 6 編に “Christ’s blood”、“sin”、“death”、“soul” が集中していることを指摘した。この 6 編を第 1 の物語群とし、語り手が “sin” を贖えずに “death” を迎えたことで、死後に自身の悔恨の涙に “Christ’s blood” の助けを得て “soul” を浄化し贖罪を得る、という物語的な繋がりを提示した。次に、HSWilt が “To E. of D” で “maim.” (8) と評される理由を、同じ *Holy Sonnets* である “La Corona” 全体、特に HSWilt と同様に時間軸を曖昧にさせる 1 番との比較で示す。そして HSWilt を補完する形で、Christ の受肉と奇跡を扱う HSSpit、HSWhy、HSWilt、HSPart の 4 編を第 2 の物語群として扱い、第 1 の物語群の末尾 HSDeath と冒頭 HSDue の間に配置することで、4 編が扱う Christ の奇跡によって詩群全体の時間軸が巻き戻されると主張。最後に、語り手の “eyes” と “heart” の身体部位が集中する 35 年版追加の 4 作品及び 33 年版の 9 番と 10 番の 6 編 (HSMade、HSSighs、HSLittle、HSWhat、HSFaith、HSBatter) を第 3 の物語群として扱い、35 年版を倣いながら第 3 の物語群を第 1 の物語群に挿入することで、神の手を用いた神 (Christ) 殺しという不敬な要素を内包しつつ、語り手の悔恨の涙と “Christ’s blood” がよりドラマティカルに演出される贖罪の物語を示した。上記の手順と新たな全体像によって、本研究では “Divine Meditations” の読みに対する新説を提唱した。

引用文献

Herbert J. C. Grierson. ed. *The Poems of John Donne*. 2 vols. Oxford: Clarendon Press, 1912. Print.

Helen. Gardner. ed. *John Donne; The Divine Poems*. Oxford: Clarendon Press, 1978. Print.

Zimplényi, Ferenc. “Oxdoxy and Irony. Donne’s Holy Sonnets N. 7 (4): At the Round Earth’s Imagine’d
Corners, Blow....” *Studies in English and American*. Budapest. 155-70. Print.

作品名表記元

Stringer, Gary A. Gen ed. *The Variorum Edition of the Poetry of John Donne*. Volume 7, Part 1: *the Holy
Sonnets*. Indiana: Indiana UP, 2005. Print.